

---

# 激情

マクスウェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

激情

### 【Nコード】

N2800M

### 【作者名】

マクスウェル

### 【あらすじ】

恋愛小説です。

よろしく願いますm( )m

## 序

部屋を掃除してましたら

叔父が生前書きためたノートが数冊  
埃を纏って出てまいりました。

埃を払い恐る恐る

ページを開きますと…

思いもよらない驚きがありました。

自分の名前が記されていたからです。

この物語を『夏海』に捧ぐ

『人生は宝箱

何が詰まっているか

開けてみるまで

わかりません』

この物語はフィクションです。

## 《序》

人は皆、愚かしい生き物です。

他人どころか自分さえも

信じられない時がある。

人は人なりに痛みや苦しみを抱えています。  
一度も失敗した事のない人なんていません。

おそらく人は愚かでなければ

何も生み出せない生き物なのです。人だから辛抱できない事もあります。

しかし、人は泣くだけ泣いた後、

必ず立ち上がり、歩き出す生き物です。

人の強さと善意を歌い、人を信じ、人を愛し、  
未来を信じて歩き出す生き物なのです。

おそらく、きっと、そのようにして

新たな物語がはじまるのです。

母と子を繋いだ緒を

断ち切るように…。

## 第壱部 出会い

私が始めて「遠子」と話したのは  
文化会館のロビーに立つ  
女神像の辺りでした。

音楽家をやっているながら  
音楽コンサートを観に行くなど稀で  
誘われなければ行つてないかもしれない。  
いや、誘われても行つてないかもしれない。  
友人の「有賀」が楽団で演奏すると言うので  
行く気になったのです。

楽団の演奏は大したものでした。  
素晴らしい音楽が目の前で流れ  
トロンボーンを吹く有賀の勇姿に感動し  
たまにはコンサートも良いものだ  
と本気で思いました。

ところが丁度三曲目の演奏が  
終わったあたりでしょうか。  
私はついに斜め後ろに座る遠子に  
気づいてしまったのです。

遠子は観衆の中で美しいばかりか  
清楚な感じがしておりました。  
それまでに経験したことない

稲妻が体じゅうに走った気がしました。

コンサートは全部で

十曲ほど演奏されましたが

私がちゃんと聴いていたのは  
始めの三曲だけで

四曲目からは斜め後ろに座る

「遠子」が気になって

どんな音楽が鳴っていたのか  
さっぱり覚えていないのです。

どうしても遠子が見たくて

仕方なく不自然にならないよう  
一曲の間一回は遠子を見るため

苦心していました。

驚きだったのはコンサート終了後の事。

ロビーの向こうから有賀と遠子が

肩を並べてやってきたのです。

そして更に驚きだったのは

遠子が有賀の妹であった事でした。

私は仲間内で

『オリツチ』と呼ばれておりました。

『おー！オリツチ。来てくれたか』

『あ、ああ。とても良かった』

『こちらは>折幸之助<君。

それからボクの妹の遠子だ』

二人は黙ってお辞儀した。

『メシでも行かないか？』

すぐ片してくるから待っててくれ』

有賀はそお言い

初対面の二人を残し

楽屋裏へ下がって行ってしまったのです。

残された私達は有賀が戻ってくるまで  
殆ど話をしませんでした。

『遅いですね』私がかう言つと

『そうですね』遠子はこう言いました

頭の中で遠子に対する

様々な疑問が駆け巡るのに  
なかなか言葉になりません。

それからすぐの事です。

『いやー悪い悪い。じゃ行こうか』

それから3人並んで文化会館の坂を下り  
丸テーブルで3人向かい合わせで  
食事をしました。

遠子がトーストグラタンを頼んだので  
私も同じものを頼みました。

（なんて美しい人だろう…

この人こそ、ボクの生涯

たった一人の人になるに違いない！  
ボクはもお確信してしまつたぞ）

いつも有賀には無遠慮でいられる私が  
遠子がいるとそうもいきません。  
ところが、心が喜びで満ち溢れ  
ある瞬間から喜びが饒舌な言葉となって  
口から出てきたのです。

『今日はとびきり良い日だ。  
音楽も食べ物も最高じゃないか！  
産まれてきて良かった』

『お？なんだオリツチ。

大袈裟だな。喰えよ』

有賀はすかさずからかいます。

遠子も笑いました。

それからというもの

遠子が少しでも笑うと

どうしようもなく幸せで

仕方がありませんでした。

（他人の笑顔はこんなにも幸せなものか）

その晩、私は日記にこう記しました。

『人生は空かも色即是空かもしれない。  
だが、この喜びは何処からくる？  
喜びを与えられてくれるものに栄えあれ』

私は運命というものがあっても良いと  
その時、本気で思ったのです。  
遠子と出会えたことは運命だと。



そして次の日、私は有賀に  
とおと聞いてみたのです。

『ところで君の妹さんはいくつかね？』

『17。まだガキンちよだよ』

『そうか。ボクは18かと思った』

本当は20くらいだと思っていました。

17なら大丈夫だろう。

17なら6つ違いだ。

ボクが26で偉くなる頃には

遠子は20歳か…

私はそんな事まで考えていたのです。

その日の晩も遠子を思わずには  
いきませんでした。

19 年5月10日

あれから三週間が過ぎた。

遠子の事が忘れられない。

忘れられないどころか

ますます肥大化している気がする。

19 年5月12日

居ても立ってもいられず

有賀君の家に遊びに行ってきた。

遠子は居なかったが

気になり、心そこに在らず。

有賀君の話を聞き漏らす程だった。  
有賀君はボクがうわの空なのに気づき  
少々ふてくされてしまった様だ。  
許せ友よ。

ともかく今日も遠子に会えなかった。

19 年5月13日

遠子が友達と街を歩いていた。  
花束を抱えていたので  
華道塾の帰りではないかと思われる。  
不意に目があったもので  
驚きのあまり立ち止まると  
遠子が微笑んで御辞儀してくれた。  
何か話したかったが、  
またもや言葉にならず。

なんてことだ！

ボクの心は別人の様だ。  
どうやら恋をすると体を流れる物質も  
自動的に変わるらしい。

ああ人生は素晴らしい！

ボクの人生には遠子がいる！

神様感謝！

遠子に出会ってからというもの  
作曲活動はかつてない程順調でした。  
次々と音楽が降ってきたのです。

ところがそのうち

何処かに行かないと

落ち着かない気持ちになり

一番親しい友人、

「鷺谷」のもとを訪ねました。

『家に居ると思ったらやはり居たか』

鷺谷のもとに通うようになったのは

19の頃でした。当時の事は

今でもハッキリ憶えております。

それは私の書く音楽、描く音楽

周りの音楽家から

叩かれまくっていた時期でした。

既に新進気鋭の作曲家だった鷺谷は

不思議と私の音楽を

褒めてくれたのです。

そこで私は鷺谷だけの為に

ソナタを書いて贈りました。

すると鷺谷は喜んで手紙を

送り返してよこしたのです。

手紙の末文にはこう書かれてありました。

『最高！暇な時は遊びに来てよ』

私は救われた気持ちで

泣きたくなるほど嬉しくなり

恐る恐る鷺谷の家を訪問したのです。

とにかく逢えば気楽な男で

欠点だと思われるところまで

長所だと説いてくれる男でした。

『他人の無責任な言動に一々右往左往してたら落ち着いて生きてけないよ』

私は鷺谷が大好きになり

度々、鷺谷と逢うようになったのです。

鷺谷はいつも喜んで逢ってくれました。

私達は時に慰め合い、鼓舞し合い

お互い腹を立てても直ぐ治り

かえって友情が増すのを感じていました。

平気でなんでも言い合える親友。

親友とは滅多に作れるものではありません。

『いらつしゃい！

ボクは出不精だからね。

そりゃ居るに決まってる。

いつも来てくれて助かるよ』

鷺谷は私を確認すると

奥まった部屋から

レコードをこっそりと持ってきて

新譜と思われる一枚を丁寧に関き

優しく針を落とし、

私に聴かせてくれました。

これが鷺谷のいつもの

おもてなしなのです。

『どうだい？』

『えっ！あ、ああ。聴いてる』

真っ先に思い浮かんだのは  
遠子の可愛い御辞儀姿でした。

『これはエルガーの

愛の挨拶という曲だよ』

『威風堂々を書いた人かい！？』

『うん。そうだよ』

『へえ、素敵だねえ。随分柔らかい』

空間は音楽で満たされ

頭の中は遠子で満たされ

私はすっかり充実しきっていました。

私は遠子の事を鷺谷に

話したいと思っていましたが

言う機会がありませんでした。

実は言おうかと思うと

言いたくない気にもなっていたのです。

『紅茶でも飲むかい？』

『うん。それから…』

さっきの曲、も一度聴きたいな』

『そうだね！ボクも丁度聴きたかった。

窓、明けてくれないか？』

『了解』

鷺谷は奥まった部屋から

レモンティーを2つ。

エルガーのレコードを丁寧に扱い、

優しく針を落としました。

瞳をとじて窓からそよぐ  
心地よい風を感じながら  
あの柔らかい音楽が流れました。

（愛の挨拶。…なんて優しい曲なんだ  
人混みの中、ボクは遠子をみつける。  
遠子もボクに気付き微笑みながら  
ゆっくり、こうするのだ…）

『イチバ〜ン！イーエイ』  
（っ！！？）

愛の挨拶で一番好きな部分の頃合い。  
それこそ一番ウツトリする部分でした。  
遠子が可愛らしく御辞儀をする部分。

庭園からキャツキヤと  
騒がしい声が聞こえてきたのです。  
遠子の幻影をかき消された。  
私は腹を立て、ギロつと  
庭先に目を移すと…

5人程の女子学生が下着姿で  
縄跳び競争をしていたのです。  
最後まで残った女子学生が  
友達の拍手を受けながら  
片手を腰。もう片方の手を天にかざし、  
さも得意気なポーズをとっていました。

『しょうがない奴だよ』

鷺谷は呆れて言いました。

私はその時、何の事を言っているのかさっぱり解りませんでした。

今、あの時の事を

思い出すと笑ってしまいます。

遠子と出会って以来、初めて遠子が私の頭から一瞬だけ消えた瞬間でした。

窓の外の景色は

悩み事全部が馬鹿らしく思える程、  
脳天気で無邪気で明るく

馬鹿馬鹿しい光景だったのです。

『おりっち！紅茶こぼしてるっ！』

『うわ！御免』

鷺谷の家を後にした帰り道。

私は自分の心があまり上品ではない事を反省しました。

自分は遠子の夫に値しない人間かもしれないと。

もっと勉強しなければならないと。

私は日本の音楽家を軽蔑していました。

しかしながら自分を顧みると

彼等以上の事は何も出来ていない。

（ホルスト、ラヴェル、ガーシュイン  
世界には嵐が吹きまわっている。

そんな人達の事を思うと

自分が情けなくなる。

嵐の真つ只中で耐えうる力が欲しい！

そしてその力を与えてくれるのは

遠子さんだ。

遠子さんがボクを頼ってくれることだ。

遠子さんにとって結婚は

幸せなものでなければならぬ。

遠子さんが喜ばないなら

結婚なんてしない方がよい。

しかし遠子さんはまだ若い。

今の内にボクはもつと

勉強しなければ！勉強だ！勉強！）

（しかし待て。ボクが偉くなる前に

遠子さんが他の誰かと結婚

してしまうかもしれない。

遠子さんは美し過ぎるのだ。

遠子さを見て心奪われない男が

いたい何処にいるだろう。

有賀君の家に行く友達はかなり多い。

遠子さんに気付かない訳がない。）

その晩はとても寝つきが悪く

眠りに就いたのは大体午前3時頃

だったと思います。

次の日も私は鷺谷の家に行きました。

鷺谷の誕生日が行われたからです。



毎年恒例行事でありますが、  
若い音楽家が集まり、  
一発芸などをします。

私は連中があまり好きではないので  
出来れば行きたくなかったのですが  
結局、毎年行つて鷺谷を  
祝つてあげたいのです。

19 年5月22日  
生涯忘れられない1日になるとは  
思つてもいませんでした。

鷺谷の家に着き、玄関先を通つていきますと  
すらつとした姿の健康そうな女の子が  
クスクスと笑いながら通り過ぎ振り向き様  
御辞儀をして駆けていきました。

何処かで会つた事のあるような無いような  
そんな不思議な気持ちで  
誰だか判らぬまま  
私も御辞儀を返したのです。

16 畳程の広間に踏み入ると  
最初に鷺谷と目が合いました。  
丁度、他の誰かさんと話をしてましたので  
私は目だけで挨拶をしました。  
鷺谷もウィンクして応えてくれました。  
それから周りを見渡すと…

驚いたことに有賀と遠子が

私を発見して手を振っていたのです。

二人を発見した私は本当に  
心臓が口から飛び出す思いでした。  
ほんのり薄化粧をした  
桃色の晴れ着に包まれた遠子は  
まるで神が地上に遣わした  
女神様の様でした。

『なんで来てるの？』

『なんでって…呼ばれたからじゃないか。  
鷺谷が今度ウチの楽団で執るから  
クラブ代表で呼ばれたんだ。』

『遠子も来たが…つてたから連れてきた』  
『ツレテキタ！？』

『私、昨日も来てましたのよ』

遠子はピョコリと顔を出し  
天使の微笑みを備えた  
意味深な言葉で私の頭の中を  
一層混乱させました。

『キノウモ！？』

不思議の国に迷い込んだ  
アリスになった気分でした。

『さ！おりつちも座ろう。』

せっかくの御馳走を目の前にして  
食べないのは大罪だぞ』  
有賀は手を叩きながら言いました。

遠子を目の前にして何も話さないのは

大罪だぞ！と言いつ返して

やろつかと思いましたが

如何せん有賀は何も知らない人です。

とにかく新参者の有賀は

馴染み有る私と座りたがりでした。机には寿司やらサンドイッチやら

フルーツやらが一通り用意されており、

おつまみと麦酒瓶も配られました。

私はそれらが全く見えておりませんでした。

ひたすら気になったのは

遠子の不思議な言動と

遠子がこんな男だらけの

場所に来てしまった事。

遠子の座る隣の席が

一つだけ空いている事。

私はひたすら気にしていました。

『ねえ有賀君。ボク一番端に移ろつか？』

『駄目駄目。知らない奴が

隣に来たら困ってしまうよ』

『でも、遠子さんの隣に

知らない人が座るよ』

『ダイジョブダイジョブ』有賀は苦笑した。

『大丈夫じゃないと思うよ』

私は必死になりました。

（有賀君は何も判つちやいない！

ここは今まさに

狼の巣窟の様な場所だ！

君は連中の浮ついた性根を知らないんだ！

音楽家は坊ちゃん貴族の放蕩者だらけだ！  
有賀くんはどうして

遠子さんを連れてきたんだ。

遠子さんの身にもしもの事が

あつたらどお責任をとってくれるのだ！

『な。遠子。大丈夫だよな？』

『え？なに？』

『おりつちがそっちに行きた…』

『遠子さん！ボボクそっちに行こうか？』

『え？ここ？』

『うん。ソコ！そこ

知らない人が来たら嫌だよね？』

『じゃ詰める？』有賀が遠子に訊いた。

『そうだね！名案だ！天才！

有賀君天才！詰めよう！』

私は大賛成でした。

『んーん。ここ予約席なの』

『え？』

（予約席なの…予約席なの…予約席なの？）

…バスン！

『おまたせ』

『おかえり』

程なくして遠子の隣 予約席とやらの  
誰かが勢いよく座りました。

あまりの勢いのよさに私はパンを詰まらせてしまうかと思いました。

（いったい、どんな人が座ったんだろう？）

私は遠子より向こうを

ギロつと眺めました。

…座ったのは女の子だったのです。

（あの子は遠子の知り合いか？

同じくらいの歳：クラスメイト？

といつても遠子に比べたら

蕾の様な女の子じゃないか。

にしても何処かで会ったことのあるような無いような。

そういう無のような。

そういえば玄関先ですれ違った女の子は

このコではないか）

よく見ると鷺谷の顔に少し似ておりました。

そして私はまたアレコレと考えたのです。

（そういえば鷺谷は

妹さんがいると言っていた。

ボクの書く曲が好きだと

言っていた気がする。

鷺谷の妹は美しいと聞いた事もあるぞ。

…まあ確かに美人の素養はあるだろう。

でも遠子さんに比べたら幼すぎる。

しかし鷺谷の妹さんだとしたら…

なぜ今まで会わなかったんだろう？

鷺谷の妹さんではないだろう。

やっぱり似てないじゃないか。

鷺谷の妹さんでもないとしたら…

この子はなつたい何者なんだ？

というより何故こんなに

この子を気にしているのだ。

遠子さんだ。遠子さんを愛しているからだ。

あの子は遠子さんの友達で

鷺谷の妹さんで

遠子さんは昨日も来ていた？

…そんなはずない。

昨日はボクも来ていたんだ。

ボクが遠子さんに

気付かないはずないだろう。

だから遠子さんは来ていない。

少なくとも昨日は来ていない（

私は考えているうちに

何がなんだか訳が

解らなくなっていました。

『それにしても鷺谷君は

大したものだね。僕等より3つ上で、

もお一流作家とは…羨ましい限りだよ』

私は鷺谷が誉められるのを誇らしく感じ、

同時に心細くも感じました。

『少し話してみたんだが彼は

随分と頭もしっかりしてる人だった』

『しっかりしてるね』

『それに家にはお金もあるから

鬼に金棒じゃないか』

『ちがいない』

私はなんとなく鷺谷の事を  
誉めたくありませんでした。  
しかし、誉めなければ  
悪いような気がしたのです。

『実際、鷺谷は日本で一番有望な  
作家だと思う。』

今にきつと日本だけではなく  
世界でも活躍してくれるはずだよ  
』  
なんとなく口と心が  
別のような気がしました。

『でも、人間わからないからね。  
ああいう人ほど腹黒いかもしれん』  
有賀は腕組みしながら笑いました。

冗談でも私はその一言に  
憤りを感じてしまいました。

『それは違う！鷺谷は善い奴だよ。  
あれほど気持ちの良い人間は他に  
居ないんじゃないかってくらいね。  
買い被るつもりはないけど  
ボクは大好きだ！』

『おりつちがそこまで言うなら本当だね。  
だって君、人間嫌いじゃないか』

『人間嫌いって訳じゃない。  
ボクは性根の腐った奴が嫌いなんだ。  
世の中、残酷な人間が多すぎる！』

いつも損しないように生きてる奴も嫌いだ。  
人間面白みがなければ」

『なら君はどんな人が好きなんだ？  
有賀は妙にニヤニヤしていました。  
その表情で一氣に恥ずかしくなり  
思い切つて『妹さんのようなかた』  
と言いたくなりました。』

『ボクは正義感が強くて、  
自分のしつかりとした意思を持ち、  
それを貫き通す人が好きだ！』

私が話し終えると、  
遠子の笑い声が聞こえてきました。  
謎の女の子は手を叩いて笑っています。  
私が話しているのを聞いて笑ったのでは  
と思い、一瞬心配になりましたが  
どうやら誕生日パーティー恒例の  
余興が始まったようです。

余興は順番にやる事になっておりました。  
前の年は一曲弾いてやり過ぎしましたが  
今年は断れば良いと腹を据えて来たのです。  
ところが誰一人として  
断る人はいませんでした。

（遠子が見ている中  
出来るはずない。絶対やるものか。  
目立ちたいのか？  
ボクはそんなの興味ない）



そして遂に私にも指名が下ったのです。

私は恐る恐る立ち、中央へと進みました。

『えー、折、幸之助です。』

残念ながらボクは

何も用意してきておりません。

どうかお許し下さい。

鷺谷君、誕生日おめでとう！』

そお言い、もと居た席に戻ろうとしました。

ところが皆は承知してくれず

やすやす引きとめられてしまったのです。

遠子が気になって、目をやると

遠子は心配そうな目で

こちらをじっと見つめていました。

私の顔は熱くなり閉口し、

何かやれたらやりたいと思いました

が何も面白い事は浮かんできませんでした。

すると誰かが『腹芸をしろ』と叫び。

皆が笑いました。

私に好意を持っていない連中は

ことさら私を責めて楽しむのです。

遠子は笑った連中を睨んでいました。

（愛しい遠子さん。

君はそんな表情も出来るのか）

『ありがとう！おりつち。

おりつちはやらなくて良かったんだ  
皆に言うの忘れてたね』

鷺谷がスツと立ち上がり拍手をしました。  
おどけてやり過ぎそうと思ったのでしよう。

それでも連中は

『鷺谷君。駄目じゃないか。

先例が出来ると良くない』

私はますます閉口し

額から汗が出てきました。

『じらさないでやれよ』

連中は声を揃えて言います。

すると

私が歩いてきた方向から

私の立っていた場所まで

スタスタ走ってきた人がいました。

『私が変わりにやる！』

私は目を点にして驚きました。

皆も思わぬ援護に驚いた様子でした。

『私じゃいけませんこと？』

それは遠子の隣に座った

謎の女の子だったのです。

集まった皆が手を叩いて喜びました。

『良すぎる！』『頑張れ！』

『二重跳び10回』

彼女はポツリと呟きました。

どつと笑いが起こり

彼女は振袖から縄跳びをサツと取り出し  
実に見事な二重跳びを披露したのでした。

1・2・3・4・5・6・7・8・9・10！

皆、一緒になって10数えました。

『もいつちよ』

彼女は3跳びサービしました。

私は彼女が顔を火照らせ

すぐ隣で跳んでる姿を見て、

泣きたくなるほど感激が

込み上げたのを今でも忘れません。

『どんなもんだい』

片手を腰。もお片方の手を天にかざし

彼女は得意気なポーズをとりました。

笑顔は爽やかに輝いていました。

大拍手喝采！！

それから鷺谷も驚いて言いました。

『おてんばなっちゃんは

何処でそんなの覚えたんだ？』

『知らないわよ！』

彼女はわざと乱暴に言いました。

その表情がたまらなく可愛らしくて

仕方がありませんでした。  
皆が一斉に笑いました。

『それだけ出来ればメシが喰える』

『訳ないでしょ！』

彼女は鷺谷を睨みつけました。  
また更に笑いが起こり…

『行きましょう。先生』

彼女は私の手を引っ張り、  
元居た席へと戻ったのです。

そして鷺谷は皆に言いました。

『紹介します！今のが

ボクの可愛い妹、鷺谷夏海です！

先日、ようやく帰還しました。

以後よろしく御願います』

鷺谷は皆に深々と御辞儀をしました。

その時、その日一番の

大拍手が起こった気がします。

お世辞ではなく

皆が彼女を歓迎している様でした。

私の御陰で白けてしまった空気が

彼女が現れ一変、

明るく元気になったのです。

気がつけば

謎はすべて解けていました。

こうして

私と「夏海」は出逢ってしまったのです。

第壹部 出逢い

… 閉幕

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2800m/>

---

激情

2010年10月26日08時15分発行